

事業報告書

平成 23 年度
(2011 年)

自 平成 23 年 4 月 1 日
至 平成 24 年 3 月 31 日

社団法人日本コントラクトブリッジ連盟

目次

平成23年度事業報告概要	1
普及事業部	6
競技会事業部	22
国際交流事業部	25
その他の事業	29
九州支部	31
福岡ブリッジプラザ	33

平成23年度事業報告概要

(自平成23年4月1日 至平成24年3月31日)

1. 新公益法人制度への対応

今年度は、新公益法人制度への対応を最重要課題として位置づけ、前年度に特別目的委員会として設置された公益法人移行委員会を中心に、公益認定取得に向けた具体的準備作業に取り組んだ。「定款」、「会員規則」、及び「会友規則」の改正案、並びに「役員の報酬および費用に関わる規則案」の新設案の承認決議を得た後、9月28日、内閣府公益認定等委員会事務局に移行認定申請書を提出した。並行して、公益法人に相応しい内部統制及びコンプライアンス体制を整備するため、新定款に則り、組織構成及び事業区分の再編、業務執行体制の見直し、並びに関連規則類の修正などを行った。

こうした努力が実り、公益認定等審議会において当連盟の公益目的事業の内容が認定基準に適合すると認められ、平成24年3月21日、内閣総理大臣より認定書が交付され、4月1日から公益社団法人として新たな一步を踏み出すこととなった。

2. 第2次5ヶ年計画（中期事業計画立案方法の変更について）

第2次5ヶ年計画の中間報告で指摘された運営管理面の問題の原因を究明するため、改めて中期事業計画の在り方を検討した。

5ヶ年計画については、全事業部を対象にトップダウンで目標を設定してきたため、当連盟の組織体制や事業の性質に必ずしもフィットしておらず、このことが運営管理面での問題とも密接に関連している考えられる。中期的視野に立って計画的に事業運営を行うという当初の目的は達成したこと、また、来年度より業務執行体制も変更となることから、これを契機に、これまでの「5ヶ年計画」を発展的に解消し、5年という枠組みにとらわれず、事業部ごとに柔軟に中期計画を立案していく形に変更した。これに伴い、第2次5ヶ年計画は4年目で終了とするが、これまで推進してきた事業の成果と反省点は、各事業部で実施する今後の事業に生かしていく。

第2次5ヶ年計画は本年度で最終年を迎えることとなったが、目標に掲げた重点項目に沿って、本年度も引き続き事業活動を行った。まず、中間報告で指摘された課題を踏まえ、項目ごとに進捗管理体制を確認するとともに、計画全体の見直しと具体目標の再設定を行った。しかし、本年度は、公益社団法人への移行とAPBF コングレス福岡大会という二つの大きな事業の準備作業が本格化したことに加え、体調不良により普及事業部長の退職が予定より1年早まり、年度後半はその対応にも追われたため、事務局業務が増大して、多くの項目で新たに設定した目標を達成することができなかった。未達となった懸案事項は来年度に優先的に取り組んでいく。

以下、5ヶ年計画の目標に沿って今年度の活動の概要を述べるが、詳細は各事業の報告を参照したい。

(1) 連盟事業の改善

健全な財務体質の実現

今年度の一般正味財産増減額は 16,961,363 円のマイナスとなり、前年度の 13,229,386 円減よりマイナス幅が約 370 万円拡大したが、予算作成時点で見込んでいた約 2,500 万円の赤字に比べると、赤字額は小幅にとどまった。費用増加の主要因は、計画どおり、組織運営体制強化のための業務委託費、普及事業部でのウェブサイトリニューアル費用、APBF 福岡大会準備費用など、一時的要因に基づくものであった。経常増減額（一般会計）は、経常収益が 239,550,658 円（前年度 240,732,570 円、約 100 万円の減収）に対し、経常費用が 256,413,455 円（同 253,880,643 円、約 250 万円の費用増）であった。東日本大震災の影響を受けた前年度に引き続き特殊要因による赤字決算が続いているが、APBF コングレス福岡大会事業終了後の平成 25 年度には、安定した水準に戻ると予想している。

事業計画の立案及び予算編成方法の改善に着手し、来年度よりスタートする新たな業務執行体制に合わせた事業計画・予算編成審議方法を策定した。また、公益社団法人への移行に向けて、予算立案時に使用する予算シートと年度事業計画書の様式を修正・変更した。

事業の効率化

事務局業務の効率化については、体制整備の観点から業務実態調査を実施した。業務担当の見直し・変更を予定していたが、普及事業部長退職に伴い、平成 24 年度に新普及事業部長が着任した後に改めて検討することとした。また、業務管理体制を強化するため、来年度より業務評価シートを変更することとし、新書式の整備を完了した。このほか、すぐに着手可能な業務効率化策の実施を予定していたが、来年度に持ち越した。

(2) 普及事業部

高橋陽子普及事業部長が予定より 1 年早く 10 月末で退職したため、後任者が着任するまで大政哲人事務局長が部長代行を兼務することとなった。事業部長が交代すること及び中期事業計画の立案体制が変更になることを勘案し、普及事業部では、第 2 次 5 ヶ年計画の枠組みの中で推進してきた事業計画・方針を踏まえつつ、新部長着任後、来年度に新たな中期計画を検討することを確認し、年度後半はこの方針に基づき事業を行った。

魅力ある競技会の開発

本年度も初心者向け競技会の開催・支援・奨励を継続した。本年度は、恒例の NECBF 初心者大会のほか、関西地区で初めてとなる「関西ビギナーズ杯」、2 回目となる「横浜ビギナーズ杯」を開催した。

「デビュタント杯（競技会未経験者限定）」を 2 回、「ビギナーズ杯△5MP／△20MP」を 5 回、計 7 回開催し、延べ 450 名（前年度 378 名）の初心者プレイヤーが参加した。

戦略的な普及活動の展開

1) 地方大都市圏の活性化

神戸でのブリッジセンター新設を軸とする関西地方活性化策は実現が困難であるため、現時点における計画の推進を断念し、来年度に普及事業全体の中期計画を検討・立案する中で、改めて検討することとした。

地方競技会への参加者増加支援を通じての活性化策として 3 年間の期間限定で実施してい

る「全国ブリッジ巡って BINGO!」は、本年度で最終年を迎えた。3年間での達成者数は延べ74名（実質50名）、全8地区制覇者は5名であった。

九州地区では、九州支部と福岡ブリッジプラザが、APBF コングレス福岡大会を1年後に控え、福岡地区におけるブリッジの普及と活性化のための活動を活発に展開した。九州支部では、地元協力組織である福岡委員会とも連携しながら、同大会を活用した普及広報活動の充実化と、大会成功を期するための支援事業の企画に取り組んだ。その具体的な成果として、平成23年4月に福岡大学で提供講座が開講した。同講座は来年度も継続する。また、例年7月に開催している山笠リジョナルはAPBF プレ大会として開催した。教育現場や地元社会における普及活動支援を継続し、草の根レベルで愛好者を増やす取り組みにも引き続き注力した。他方、プラザでは、平成24年度を目途に収支を均衡させ、プラスに転じた段階でなるべく早く独立運営に移行するという中期目標に向け、今年度も従来の活動を充実させる方向で事業を実施した。地元プレイヤーを中心とした組織的な運営体制の確立という重要課題は、残念ながら本年度も実現には至らなかった。

2) 普及システムの強化

全国各地の普及およびブリッジ指導活動に携わる会員・会友と普及事業部をつなぐネットワーク「普及ネット」は3年目を迎え、年度末時点で236名が登録を更新した。今年度も、普及協力者の負担軽減策の一環として助成制度の見直しと充実化に努めた。

国際事業の活性化

1) 2012APBF コングレス福岡大会広報活動

海外・国内双方からより多くの参加者を募るため、大会ウェブサイト平成23年8月に開設、競技会及び宿泊情報の発信を開始した。また、大会PR用に、平成22年度に日経BP 広告賞優秀ライフスタイル賞を受賞したイメージ広告及びJCBLのマスコット橋之介のイラストのAPBF コングレス福岡大会バージョンを制作し、利用を開始した。

2) マインドスポーツ普及活動の支援

マインドスポーツとしてのブリッジを社会に向けてアピールすることは、ブリッジの社会的認知度向上に大きく資するとの観点から、囲碁、チェス、シャンチー、チェッカー各団体とのタイアップ活動を継続した。

APBF コングレス福岡大会のサイドイベントとして計画していた「マインドスポーツシンポジウム」は一般の人々がより楽しむことができる「マインドスポーツ体験教室」に変更して開催することとし、準備作業を進めている。

ジュニア・ユース層への普及活動

ジュニア層：7年目を迎えたジュニアくらぶ活動では、一昨年後半あたりから始まった入会者数やイベント参加者数の減少傾向に拍車がかかっている。こうした傾向に歯止めをかけるため、普及の原点に戻り、ジュニア向けの普及活動では体験イベントを強化する方針に切り替えた。

ユース層：大学でのブリッジ講座数が増え、本年度は東京大学、早稲田大学に加え、福岡大学でも講座が開設された。平成24年度には青山学院大学でも講座がスタートする予定である。

(3) 競技会事業部

魅力ある競技会の開発

会員からの要望の応え、来年度より、土曜日開催の連盟主催競技会への地方からの参加者を対象に、前日宿泊の場合の宿泊費補助制度を新設した。また、連盟主催競技会の上位入賞者に対する賞品に選択肢を追加した。

競技会の環境改善

防災及び救急対応のためのサンプルマニュアルを作成し、常設会場に配付するとともに連盟サイトで公開した。ガイドライン及びマニュアル類の整備が完了したため、センターサービス向上委員会は活動を終え、同委員会が担当していたゲーム環境向上のための支援事業は事務局で引き継いだ。

競技会運営ソフト（JTOS）の保守およびバージョンアップ

ブリッジメイト導入に伴う JTOS の改造作業が終了、バージョン 3.0 を 8 月にリリースし、連盟サイトでの公開と CD 配付を開始した。3 月末時点で 171 件のダウンロード、38 件の CD での配付があった。

ディレクター育成

前年に続き、ナショナルディレクター養成プロジェクトが希望者に対して実習および試験を行ったが、本年度は推薦者がでなかった。同じく、クラブディレクター育成のための講習会も引き続き開催した。

(4) 国際交流事業部及びその他の事業

APBF 選手権

マレーシアのクアラルンプールで開催された第 48 回 APBF 選手権大会では、オープンおよびウィメンズチームが 3 位、シニア（山田）チームが 5 位、ジュニアチームが 3 位、ヤングスターチームが 5 位であった。ジュニアおよびヤングスターは 2012 年 7 月に中国太倉市で開催される世界ユースチーム選手権に出場する。

世界チーム選手権出場をかけたプレイオフで、オープンとシニアは初戦に勝ち、出場権を獲得した。ウィメンズは 2 戦連敗したため出場権を逃したが、後日チャイニーズ・タイペイチームが出場を辞退したため、日本が代わって出場することになった。

世界チーム選手権

オランダのフェルトホーフェンで開催された世界チーム選手権はオープンが 9 位、ウィメンズが 14 位、シニアが 17 位で、いずれも決勝ラウンド進出はならなかった。

NECブリッジフェスティバル

第17回NEC杯は、海外15チームを含む46チームが参加し、海外から参加した7チームと国内1チームが決勝トーナメントへ進出、オーストラリア・ニュージーランド混成チームDown Underが初優勝した。

APBF コンgress福岡大会

平成 24 年に福岡で開催される第 7 回 APBF コンgress実行委員会は、平成 23 年度の山笠リジョナルを APBF コンgressのプレ大会として位置づけて運営支援を行い、APBF ファ

ンドゲームを開催し、プレ大会への参加助成を行った。

3. 人事異動

高橋陽子普及事業部長が予定より1年早く10月末で退職した。これに伴い11月1日付けで大政哲人事務局長兼国際交流事業部長が普及事業部長代行も兼任することとなった。高橋部長の後任者を公募し、清水映樹氏を採用、平成24年4月1日に着任することとなった。また、平成24年3月に福崎洋子事務局員が退職し、平成24年4月より貴戸祥郎氏を新規採用する。

九州支部では、年度初めに、小山紘支部長の退任に伴い、勝部俊宏理事が新支部長に就任した。

普及事業部

【収入 1,451 千円／予算 2,725 千円、支出 71,059 千円／83,577 千円】

普及部会 【支出 9,424 千円／予算 12,747 千円】

1. ブリッジの普及のためのイベントへの参加、講習会などの開催及び普及活動支援

(1) 「第 26 回国民文化祭 2011 京都」競技文化フェスティバル（支出 731 千円／予算 871 千円）

囲碁・将棋・百人一首とともに、今回初めて「競技文化フェスティバル」のカテゴリーでの参加と競技会開催が要請されたことから、通例の体験教室のほかに、初心者向け競技会も開催した。スタッフは事務局員、首都圏から派遣する普及部会員のほか、京都、大阪周辺地域の会友にも依頼し、相互の協力関係の強化と普及イベント運営ノウハウの伝達に努めた。ビギナーズ杯には全国から15ペアを抽選で招待する「京都でブリッジ・キャンペーン」を行うことにより参加者数の増加を図るとともに、初心者同士が交流を持つことで、さらにブリッジに魅力を感じていただく機会とした。

会 期： 平成23年10月29日、30日（2日間）

会 場： 京都府総合見本市会館（京都パルスプラザ）

事業概要： ① ミニブリッジ体験教室、練習サロン

参加者数：約 150 名（10月29日：100名、30日：50名）

② 初心者大会 「関西ビギナーズ杯（△5MP／△20MP）」（10月30日

参加者数：△5MP 46名（内招待14名）、△20MP 28名（同16名）

国民文化祭での大会ということで、「京都府教育委員会教育長賞」が各フライトの優勝ペアに授与された。

③ パネル、カード及びブリッジが登場する小説などブリッジ関連資料の展示

④ 各種 PC ソフトウェア紹介とプロモーションビデオ放映

広報活動： ① 体験教室

- 会報 3 号で会員向けに告知

- 産経新聞夕刊（8月30日）、リビング（10月22日付）、朝日新聞（10月20日付）に告知広告掲載

② ビギナーズ杯

- 大阪ブリッジセンター及び関西在住ブリッジ・インストラクターにチラシ送付

- ホームページにバナー掲出

- DM ハガキ発送（64名）関西在住の初心者会友向け

(2) まなびピア「平成 23 年度全国生涯学習ネットワークフォーラム岩手大会」}（支出 0 円／予算 342 千円）

東日本大震災の影響により、本イベントの開催が中止となった。

(3) NECブリッジフェスティバル体験教室（参加料収入 241 千円／予算 234 千円、支出 953 千円／支出 994 千円）

本事業は、①未認知者・未経験者にブリッジの楽しさを紹介する「体験教室」と、②入門講習修了者に競技の楽しさを体験してもらうことを目的とする「初心者大会」を二本柱としている。この二本柱を軸に、マインドスポーツ5種目を紹介することで、マインドスポーツ全体及びマインドスポーツとしてのブリッジの認知度向上を図った。初心者大会では、昨年引き続き、全国の新人プレイヤー9ペアを抽選で招待するキャンペーン企画を実施した。

本イベントは、普及活動に関心のある会員に、普及事業部がこれまでの活動から得たノウハウを体験・研修してもらう場としても位置付けており、5名の参加希望者から2名を選び研修を行った。

2日間の総来場者は約360名と、前年度を90名下回った。初日が平日だったこともあり、体験教室の参加者数が減少したことが主な要因であるが、初心者大会の参加者数は前年度比で約40名の増加となった。

会 期： 平成24年2月10日、11日（2日間）

会 場： 横浜国際平和会議場（パシフィコ横浜）

イベント名：「Let's Play マインドスポーツ！ ミニブリッジ体験教室 with 囲碁・チェス・チェッカー・シャンチー」

協力団体： 日本棋院、日本チェス協会、日本チェッカー・ドラフツ協会、日本シャンチー協会

事業概要： ① マインドスポーツ体験教室・シールラリー

参加者数：延べ 120 名（2月10日 31名、11日 89名）

シールラリー達成者数：46名（10日 9名、11日 37名）

② 初心者大会「デビュタント杯」、「ビギナーズ杯 MP△5／△20」（2日間）

参加者数：延べ 236 名、内招待者 18 名（前年度 193 名）

参加者数	10日	11日
「デビュタント杯」	23名	28名
「ビギナーズ杯△5MP」	42名	51名
「ビギナーズ杯△20MP」	48名	44名

③ チャリティ古書市

昨年引き続き2回目のチャリティ古書市を実施した。会員・会友から提供していただいたブリッジ書籍と未使用カードが段ボール箱6ケース分と多かったこともあり、1冊（1点）100円以上の寄付を募ったところ、総額67,922円が寄せられた。これにJCBLから32,078円を追加し、合計10万円を開発途上国の子どもたちに教育支援を行っているNGO団体「ルーム・トゥ・リード」に寄付した。

後日同団体のウェブサイトとFacebookにNECブリッジフェスティバルとチャリティ古書市の記事が写真付きで紹介された。

広報活動： ① 広告掲載

- ・ 朝日新聞朝刊 東京本社版（1月27日）…東日本全域、240万部
- ・ リビング横浜東・横浜南・田園都市各版（2月4日）

② チラシ

- ・ 体験教室チラシ及び初心者大会チラシ
首都圏のブリッジセンター、神奈川県内の公認クラブ、ブリッジを教えている会員・会友に送付し、配布を依頼
- ・ ホテル設置用チラシ

③ ウェブサイト

- JCBL ウェブサイト トップページにバナー掲載
- 日本棋院ウェブサイトに案内を掲載

④ 広告掲載誌効果

朝日新聞とリビング各紙の広告効果は、「広告を見た」と申し出た参加者に JCBL オリジナルメモパッドをプレゼントする方法で集計。

- 朝日新聞：25名（10日9名、11日16名）
- リビング：18名（10日2名、11日16名）

昨年と逆転し、朝日新聞の方が多く結果となった。

(4) 「ブリッジを愉しむ会」(参加料収入 460 千円／予算 560 千円、支出 737 千円／支出 730 千円)

日頃ブリッジをする機会が少ないプレイヤーを対象に、懇親会形式で4回実施。計104名が参加した。参加料¥5,000/1人徴収、飲食付

開催日(参加者数)：①4月13日(32名)、②7月13日(28名)

③10月12日(24名)、④1月11日(20名)

(5) ミニブリッジ指導法講習会(支出 0 円／予算 749 千円)

① ミニブリッジから入るブリッジ指導法講習会

依頼ベースでの開催を予定していたが、本年度は開催要請がなかった。

国民文化祭や NEC ブリッジフェスティバルなどの普及イベントに参加した普及協力者を対象とする研修や個別指導と OJT を中心とする指導者育成活動は、本年度も継続して実施した。

② 体験教室実施マニュアル映像の制作

実際の体験教室光景を 15 分程度の動画にまとめたマニュアル映像の制作を予定していたが、普及現場においては初心者向け汎用教材に対するニーズが高いことが判明したため、本事業を保留して、初心者向け教材の開発を優先させることとした。

(6) 体験教室・講習会への助成(支出 3,318 千円／予算 3,490 千円)

体験教室・入門講習会を開催して愛好者を増やしたいという会員・会友の自己負担を軽減する支援を継続し、開催場所・回数増を図った。また、カルチャースクール講座では通常支払われないアシスタント料を助成することにより、良質なブリッジ講座の開催を支援した。

7月には助成規定の改訂を行い、講師・アシスタントの更なる自己負担軽減のため、交通費も新たに助成の対象とした。

① ブリッジセンター、クラブ及び個人が開催する体験教室の助成

10 都道府県の教育現場や文化祭、地域イベント、国際交流イベント、老人福祉センター、同窓会、公民館、BC、海外クラブ、クルーズで、会員・会友が開催した体験教室の講師／アシスタント料、会場費、交通費を助成した。

地域別実施状況内訳

地域	参加者数	件数 (回数)	助成額
北海道	127名	6件 (8回)	¥134,040
宮城	16名	1件 (2回)	¥52,480
栃木	98名	2件 (4回)	¥126,400
茨城	12名	1件 (1回)	¥12,000
東京	174名	13件 (20回)	¥219,425
埼玉	115名	1件 (1回)	¥26,120
千葉	40名	6件 (6回)	¥65,880
神奈川	198名	9件 (14回)	¥250,120
福岡	6名	1件 (1回)	¥7,140
長崎	55名	1件 (1回)	¥29,760
海外	104名	2件 (3回)	¥64,000
クルーズ	70名	1件 (2回)	¥18,000
合計	1,015名	45件 (63回)	¥1,005,365

② クラブ及び個人が開催する入門教室の助成

6 都道府県及びジャカルタ、シンガポールなどで会員・会友が開催した入門講習会の講師料、会場費、交通費、及びクルーズのアシスタント料を助成した。

地域別実施状況内訳

地域	参加者数	件数	助成額
北海道	78名	6件	¥412,280
宮城	10名	1件	¥13,750
栃木	32名	3件	¥157,780
東京	24名	3件	¥117,475
埼玉	12名	1件	¥4,000
神奈川	36名	3件	¥164,850
海外	28名	3件	¥99,000
クルーズ	146名	3件	¥381,000
合計	366名	23件	¥1,350,135

③ カルチャー講座助成

6 都道府県で開講されているカルチャースクール講座 28 件について、アシスタント料、講師・アシスタント交通費の助成を行った。

地域別実施状況内訳（アシスタント交通費助成を含む）

地域	参加者数	件数	助成額
東京	281 名	19 件	¥651,260
千葉	34 名	5 件	¥158,760
埼玉	4 名	1 件	¥44,400
神奈川	14 名	1 件	¥27,360
山梨	8 名	1 件	¥47,200
熊本	15 名	1 件	¥32,160
合計	356 名	28 件	¥961,140

(7) カルチャースクール特別助成（支出 189 千円／予算 500 千円）

ブリッジ普及にあたり特に重要であると普及事業部が判断する地域のカルチャースクール講師料を助成した。

対象カルチャーセンター：ヨークカルチャーセンター長野

2. 地方活性化支援活動（2,024 千円／予算 3,135 千円）

地方におけるブリッジ活性化／会員数増加のため、地方ブリッジの実態把握と支援活動に努めた。初級プレイヤーが楽しんで継続できる環境づくりを行うブリッジセンターを積極的に支援するとともに、本年度は新たな試みとして、地方の普及担当者を対象とする実地研修会を実験的に開催した。

(1) 地方大都市圏活性化プロジェクト

第二次 5ヶ年計画の一環として神戸でのブリッジセンター新設を軸とする関西地方活性化策を検討してきたが、現時点においては実現が困難であるため、計画の推進を断念した。

中期計画立案体制の変更に伴い、来年度は普及事業全体の中期計画を検討・立案する計画である。この中で、地方活性化策についても改めて検討していく。

(2) ブリッジクラブ等が実施する普及・広報活動の支援

本年度は以下の支援活動を行った。

- 仙台 BC の体験教室（10 月）
- 大阪 BC 体験教室の広報支援として産経新聞に広告掲載（8 月）
- 「ヨークカルチャーセンター長野」講師交通費支援
- 浜松リジョナル開催時に「地方クラブ会議」（7 月）を開催、地方のブリッジ関係者と直接情報共有・意見交換
- 長崎チェス&ブリッジクラブ主催「第 4 回長崎居留地まつりブリッジ大会新人戦」に優勝グラス寄贈（9 月）
- 「新潟ブリッジ同好会 20 周年祭」出張支援（10 月）
- 佐賀市の非会員から寄せられた体験教室開催要望に応え、「佐賀市歴史民俗館活用事業」に応募、体験教室を開催した（8 月）
- 日立 BC の沖縄でのセクショナル開催にあわせて体験教室を開催、講師 2 名を九州から派遣するとともに、会場費、媒体広告費（沖縄レキオ）を支援した（12 月）

(3) ニーズ調査の実施（広報部事業）

真に必要とされる効果的な支援を行っていくため、11月から12月にかけて、全国のブリッジクラブを対象にアンケート調査を実施した。本調査結果は、今後の普及事業に活用していく。

(4) 地方の普及担当者を対象とする研修会の実験的開催

国民文化祭及びNECブリッジフェスティバルの普及イベントで、地方在住で普及に関心のある会友を対象とする実地研修を行なった。参加希望者が多く、参加した方の感想も好評であることから、この活動は来年度以降も継続していく。

3. 海外クラブへの支援（支出0円／予算30千円）

ジャカルタ、アムステルダム、デュッセルドルフ、シンガポールの日本人会ブリッジ部メンバーからの体験教室などの相談に対応し、各種資料を提供した。

4. 会員サービス活動「全国ブリッジ巡ってBINGO!」（支出265千円／予算250千円）

地方競技会の活性化と会員の相互交流促進を目的に3年間限定で実施してきた本企画は、本年度で最終年を迎えた。最終年のビンゴ達成者は39名と最後の1年間で達成者数が急増した。広島、東海地区のクラブにはプレイヤーを派遣する制度があり、多数の応募があった。3年間での達成者数は延べ74名（実質50名）、全8地区制覇者は5名であった。期間中のビンゴ賞獲得者全員の中から抽選で1名を、APBF コングレス福岡大会に招待する。

5. 会員獲得及び定着活動（収入207千円／予算260千円、支出1,136千円／支出1,437千円）

(1) 新入会・再入会キャンペーン

実施期間：平成23年1月1日～4月30日 ※平成18年度の導入以来、6年目の企画
事業概要：会報、JCBLウェブサイト、各ブリッジセンターへのポスター配布などの方法で告知を行い、期間中の新入会者／再入会者／紹介者にQUOカードを進呈した。

結果：

期 間	期間中入会者	内紹介者あり	紹介者	前年度比
平成23年1～4月	234名(新187/再47)	134名	65名	+9名(△29/△28)
(平成22年1～4月)	225名(新185/再40)	163名	93名	△10名(+10/+10)
(平成21年1～4月)	235名(新189/再46)	153名	83名	+27名(+2/+2)
(平成20年1～4月)	208名(新178/再30)	151名	81名	△13名(+17/+11)

(2) 初心者大会の主催（NECブリッジフェスティバル時以外）・共催

横浜ブリッジセンターで2回目となるビギナーズ杯を開催した。このほか、前述の「第26回国民文化祭2011京都」で「第1回関西ビギナーズ杯」を開催した。

横浜ビギナーズ杯概要

開催日：4月20日（午前・午後）
会 場：横浜ブリッジセンター
参加者数：△5MP 午前51名 午後48名 合計99名
△20MP 午前24名 午後17名 合計41名

(3) NECBF ビギナーズ杯招待企画

事業概要： 全国の新人プレイヤーに「旅とブリッジ」の魅力を知ってもらい、新人プレイヤー同士の交流やNECブリッジフェスティバルという国際大会の雰囲気を楽しんでもらうことで、ブリッジへの一層の定着を図る。全国の△20プレイヤーの応募者の中から抽選で9名をNECBFビギナーズ杯にペアで招待した。招待内容は、交通費・宿泊費のパック料金と初心者大会参加料。

実施期間： 平成23年10月～平成24年2月

応募期間： 平成23年11月1日～12月16日 発表：12月22日

結果： 応募総数 62名（会員23名、一般39名）
当選者内訳 △5=6名、△20=3名
それぞれ地元パートナーとともに参加、パートナーを含め10名入会

(4) その他の初心者大会支援

- 「第4回長崎居留地まつりブリッジ大会」
(9/17、会場：長崎市旧香港上海銀行（重要文化財）、△50 対象）
優勝ペアへの賞品提供を行った。

6. 普及ネットプロジェクト（支出 68 千円／予算 220 千円）

本年度は、「ブリッジ・インストラクター（略称：BI）」に 236 名が登録した。希望者 154 名に登録証を発行し、郵送した。

現場のニーズを反映しやすい普及基盤の拡大を目指して、従来は BI のみを対象としていた「普及ネット」を一般に拡大する方向で、普及事業の運営体制全般の見直しに着手した。公益法人化に伴う組織改編、業務執行体制の変更、中期事業計画立案体制の変更も加味して、普及事業部全体の事業戦略という枠組みの中で来年度も引き続き検討していく。

教育部会【支出 1,743 千円／予算 2,020 千円】

若年層の底辺拡大と社会におけるブリッジに対する認知度向上のため、教育現場におけるブリッジ普及活動を活性化させることを目的に、次の事業を実施した。

1. 東京大学ブリッジ講座支援（支出 623 千／予算 670 千円）

本年度も引き続き、東京大学教養学部全学体験ゼミナール「考える力を養う／コントラクトブリッジ」の開催を支援した。開講 7 年目を迎えた同ゼミナールは、同大学内のみならず、全国レベルでのブリッジの社会的信用度の向上に貢献している。

概要： 夏学期（4月～7月）・冬学期（10月～1月）の2期、夏は全13回、冬は全14回

取得単位数 2 単位、東京大学駒場キャンパス

受講状況： 夏学期 履修登録 30 名 単位取得者数 24 名
冬学期 21 名 18 名

事業内容： ① 準講師格アシスタント 2 名の派遣
② 四谷 BC での最終講義（競技会、BC 見学）開催支援
③ 授業準備（教材コピー、発送作業、ボード組み込みなど）支援
④ 受講生への JCBL 会報配布支援

2. 早稲田大学「コントラクトブリッジで学ぶ数理科学入門～論理的思考力を身につけよう」
(支出 1,119 千円／予算 1,200 千円)

早稲田大学メディアネットワークセンターの提携講座「コントラクトブリッジで学ぶ数理科学入門」を支援した。

同講座はオープン科目という位置付けで、学習院大学、学習院女子大学、日本女子大学、立教大学、東京家政大学、及び提携高校の生徒も履修が可能である。3年目を迎えた本年度はブリッジ部からのアルバイトに加え、未登録の学生や履修済みの学生も毎回3～6名程度が出席し、フローターやアシスタントとして授業に参加した。出席率も平均80%と高水準だったので、常時7～8テーブルが成立した。受講生とブリッジ部の距離感が近く、履修後にブリッジ部に入部して継続する学生が多い。3年間で95名が単位を取得し、このうち91名が今後ブリッジを続けたいと答えている。

概要： 春学期（4月～7月）・秋学期（10月～1月）の2期、各15回

取得単位数2単位、早稲田大学理工学部キャンパス

受講状況： 前期 履修登録者 30名 単位取得者数 26名
後期 30名 18名

事業内容： ① 講師料、アシスタント料支援
② 教室使用料支援
③ 交通費支援
④ 授業・学会発表に要する費用の経費の支援（印刷・コピー費など）

3. 学校ブリッジ講師養成・助成（支出0千円／予算23千円）

本年度は、教育現場からの講師派遣要請はなかった。

4. ブリッジ授業拡大活動（支出0千円／予算127千円）

JCBL関係者からの働きかけにより、平成24年4月から青山学院大学でブリッジ講座を正規授業として開講することが決定した。

ユース部会【支出5,814千円／予算6,630千円】

若年層へのブリッジ普及のため、本年度は以下の事業を行った。

1. 青少年対象イベントへの参加（支出36千円／予算121千円）

目的： 教育関連機関（文部科学省・教育委員会・学校・PTAなど）や行政機関（都道府県・市町村）などが主催する青少年対象イベントで体験教室を開催し、ブリッジの認知度・信頼度の向上を図る。

- 文部科学省「子ども霞ヶ関見学デー」ミニブリッジ体験コーナー出展

開催日：8月17、18日 場所：文部科学省

- 各地の教育現場で開催された文化祭やPTA行事、放課後の学童保育などでのブリッジ紹介活動を積極的に支援した。例：品川区立日野学園すまいるスクール、武蔵野第一中学校、茅ヶ崎市立赤羽根中学校、さくら市立喜連川小学校ふれあいスクール、など。

2. 現役ユースへの支援

目的： 現ユース・ジュニア会友を含め、青少年がブリッジを通して心身・勉学ともにバランスの取れた健全な成長をしていくことを最優先におきながら、若年層プレイヤーの育成と底辺拡大をめざす。大学や高校のクラブへの支援、学生が運営する学生リーグへの支援・助成、意欲ある若年層のための強化プログラムなどの技術向上支援、及び日本代表としての海外遠征機会の提供・助成を行い、若年層がブリッジを継続できる環境を整備する。

(1) 大学クラブ新入部員勧誘活動助成（支出 0 円／予算 120 千円）

4 月～6 月にかけて行なわれた学生リーグ加盟各大学の新人勧誘活動にあたり、学生からの要望に応え、必要な印刷物（チラシ、ポスターなど）の大量印刷、用紙の提供など、現物支給の形で支援した。経費は発生せず。

- 平成 23 年度大学ブリッジクラブ・同好会部員数： ※（ ）内は平成 23 年度新入部員数
東北大学 20 名（8 名）、東京大学 13 名（4 名）、学習院大学 3 名（1 名）、早稲田大学 7 名（3 名）、慶應義塾大学 5 名、京都大学 4 名（1 名）、同志社大学 3 名（2 名）、大阪大学 13 名（6 名）；計 8 大学 68 名（新人 25 名）
- このほか、名古屋大学、北海学園大学（札幌）、電気通信大学に、正規クラブではないがブリッジをプレイする学生（留学生を含む）のグループが、また、千葉大学、横浜国立大学、東京理科大学には組織に属していない個人プレイヤーが存在する。いずれも、学生リーグや JCBL ユース部会と連絡を取り合い、必要に応じて支援できる体制を整えている。
- 同志社大学ブリッジクラブに、ヘルマン氏図書基金より入門書籍を購入して寄贈した。

(2) 学生選手権の支援（支出 415 千円／予算 399 千円）

学生リーグが主催する学生選手権（夏季・春季の 2 回）に参加したブリッジ 1 年目の学生の宿泊費、及び遠隔地から参加した 1 年目の学生の交通費を助成した。本年度の夏季学生選手権は当初 8 月に開催を予定していたが、東日本大震災の影響で東北大学の前期授業が 8 月までずれこみ、夏季休暇が 9 月となったため、9 月開催の連盟主催ユースキャンプと連続する形で、同一会場で行った。

① 夏季学生選手権

期 間： 平成 23 年 9 月 12 日～16 日

会 場： ホテルウィングインターナショナル相模原

参加者数： 大学生 44 名（うち、ブリッジ 1 年目の学生 15 名）

学生選手権の結果（9 チーム）：

1 位 慶應義塾大学、2 位 東京大学 B、3 位 東京大学、4 位 東北大学

② 春季学生選手権

期 間： 平成 24 年 3 月 12 日～15 日

会 場： 東京都渋谷区国立オリンピック記念青少年総合センター

参加者： 大学生 39 名（うち、ブリッジ 1 年目の学生 19 名）

学生選手権の結果（8 チーム）：

1 位 U21、2 位 大阪大学 A、3 位 東京大学、4 位 慶應義塾大学

(3) ユースキャンプ（支出 333 千円／予算 406 千円）

学生同士の交流促進と技術向上支援を目的とする JCBL 主催のブリッジキャンプを開催した。全国の学生を対象に、広く一般から参加者を募るオープンキャンプとし、JCBL 及び各大学のブリッジクラブのウェブサイトなどを通じて告知・PR 活動を行った。2 年目となる本年度は、学生の意見を取り入れ、夏季学生選手権と連続する形で、同一会場で開催した。

期 間： 平成 23 年 9 月 10 日～12 日
会 場： ホテルウィングインターナショナル相模原
参加者数： 学生 30 名、講師 2 名
助成内容： 講師 2 名の派遣、宿泊費補助（8,000 円／1 人）

3. ユース代表選抜・強化プログラム・国際試合への派遣

意欲ある若年層プレイヤーのために、強化プログラムによる技術向上支援と日本代表としての海外遠征機会の提供・支援を行った。

(1) 第 48 回 APBF 選手権大会への派遣（支出 1,885 千円／予算 2,466 千円）

会 期： 平成23年6月15日～24日（10日間）

開催地： マレーシア、クアラルンプール

派遣チーム： NPC 山後秀幸

ジュニア（U26）：

貴戸祥郎（大阪大学）－小池紀彰（大阪大学）

半田康一（東京大学）－杉本大輔（慶應義塾大学）

北村孝之（早稲田大学）－木山智裕（大阪大学）

ヤングスター（U21）：

仁田諒（東京大学）－中須賀謙吾（東京大学）

蜂谷雄介（東北大学）－武山詳（東北大学）

八木壮介（慶應義塾大学）－稲葉達哉（早稲田大学）

助成内容： 航空運賃、宿泊費、参加料、海外保険料、ユニフォーム代

※ グレード 1 の国際試合のため、選手は 1 人当たり 2 万円を負担した。

結 果： ジュニア 参加 10 チーム中 3 位

スクール 参加 6 チーム中 5 位

(2) 世界ユースコンGRESS大会への派遣（支出 1,359 千円／予算 1,276 千円）

会 期： 平成23年8月21日～30日（10日間）

開催地： クロアチア、オパティヤ

派遣チーム： 小池紀彰（大阪大学）、貴戸祥郎（大阪大学）、北村孝之（早稲田大学）、
松田崇志（東京大学）、杉本大輔（慶応大学）、木山智裕（大阪大学）

助成内容： 航空運賃、宿泊費、参加料、海外保険料、ユニフォーム代

※ グレード 2 の国際試合のため、選手は 1 人当たり 3 万円を負担した。

結 果： 予選は参加 27 チーム中(20カ国)7位で通過、準々決勝で敗退

(3) 代表強化プログラム（支出 1,451 千円／予算 1,542 千円）

平成 23 年度の日本代表選手及び平成 24 年度代表候補登録者を対象に、講習会・練習会及び代表選考会などから成る代表強化プログラムを実施した。集中講習会は学生の休み期間中に開催するよう留意した。遠隔地からの参加者には、仲間の自宅や関係者関連で廉価で宿泊可能な場所を紹介するなど、学生自身の負担金の軽減に努めた。

プログラム概要：① 集中講習会・練習会の開催

年末特別練習会、強化練習、直前練習会など

② 実戦練習会

指定競技会での実戦練習、競技会前後に講習会を開催

対象競技会：柳谷杯、横浜インビテーションショナル、朝日新聞社杯、NEC 杯、木村六郎杯、兵庫県知事杯

③ 代表選考会開催（第一次・第二次）

参加料： 講習会・競技会・代表選考会への参加料は無料
交通費・宿泊費は原則自己負担だが、遠方からの参加者には助成

(4) 海外競技会への参加助成（支出 200 千円／予算 300 千円）

本事業は、若年層プレイヤーに、世界のブリッジに触れ、国際経験を積む機会を提供することを目的としている。

本年度は、ポルトガル、アソーレス諸島にあるサンミゲル島のポンタ・デルガダという都市で開催されたアソーレス国際ブリッジ大会への参加費用を、4名に5万円ずつ助成した。

ジュニア部会 【支出 1,336 千円／予算 2,970 千円】

ジュニア層を対象に下記事業を実施した。

1. ジュニアくらぶ活動（支出 434 千円／予算 1,234 千円）

本年度のジュニアくらぶへの新規入会者数は 11 名（平成 22 年度 29 名）、年度末時点での会員数は 237 名（同 233 名）、各種イベントへの延べ参加者数は 120 名（同 262 名 ※ジュニアのみ）であった。一昨年後半あたりから始まったジュニアくらぶへの入会者数やイベント参加者数の減少傾向に拍車がかかっており、申込みが少ないためにやむを得ず開催を中止したイベントも複数あった。

こうした傾向に歯止めをかけるため、普及の原点に戻り、できるだけ多くの未経験者にブリッジの楽しさを体験してもらって裾野を広げていくことに重点を置いて体験イベントを強化することとし、年度後半からこの方針のもとでの活動を開始した。同時に、「ジュニアくらぶ」システムそのものがリピーター層にとっては新鮮味が薄れてきたため、来年度末をもってスタンプラリー制度を廃止し、イベントの内容も見直して、「ジュニアくらぶ」システム全体をリニューアルすることとした。スタンプラリー制度廃止の周知徹底を図るため、本年度末よりジュニアくらぶ会員向けの告知を開始した。

事業概要

(8) ジュニア層向け普及広報活動全般の企画・運営

(9) ジュニアくらぶイベントの企画・運営

(10) ジュニアくらぶ活動の運営・管理

発足から 6 年が経過する過程でジュニアくらぶ会員数やイベント開催数が増加したことに伴い、会員データやスタンプラリーの管理システムが複雑になってきたため、事務局内外の担当者の業務負担が増大していた。このため、管理体制を見直し、事務作業の省力化・効率化を図った。

(11) ジュニア向け広報活動

- ジュニアくらぶ通信の編集・発行を行った。年 4 回発行の季刊誌だが、2012 年春号の発行時期が 4 月にずれ込んだため、本年度は 6 月、10 月、1 月に 3 回発行した。
- このほか、会報ジュニアコーナー・ウェブサイトのジュニア向けページの記事の編集・作成・掲出、チラシ・ポスター制作・配付、登録者向けのイベント情報のメール配信などの広報活動を行った。

※ ジュニアくらぶ活動では、四谷、横浜、及び京葉ブリッジセンターより、無料または格安での会場の提供をはじめ、さまざまな形でご協力・ご支援をいただいている。

ジュニアクラブイベント開催状況（平成 23 年度）

イベントタイプ	開催数	参加者数						(人)	
		未就学	小学生	中学生	高校生	ジュニア計	一般	合計	
体験教室・サロン	13 回	2	34	6	2	44	12	56	
橋之介道場	10 回	0	18	6	2	26	5	31	
大会	4 回	0	19	6	3	28	11	39	
キャンプ	2 回	0	10	5	0	15	1	16	
集中講座	2 回	0	5	1	1	7	2	9	
合計	31 回	2	86	24	8	120	31	151	

開催場所別（全イベント）

四谷 BC	13 回	1	27	9	3	40	10	50
横浜 BC	11 回	0	27	1	1	29	7	36
京葉地区	3 回	0	12	4	3	19	8	27
その他	4 回	1	20	10	1	32	6	38
合計	31 回	2	86	24	8	120	31	151

2. ジュニアサロン及び体験教室（支出 98 千円／予算 270 千円）

四谷ブリッジセンター、横浜ブリッジセンター、及び京葉ブリッジセンターで、ブリッジが未経験のジュニアからヘビーリピーターまで参加できる無料イベントとして定着しているジュニアサロンに加え、体験イベント強化の観点から、年度後半は単独のミニブリッジ体験教室も 2 回開催した。

また、実験的な試みとして、八王子ブリッジクラブの協力のもと、経験の有無や年齢を問わず、参加者全員がミニブリッジを通して半日楽しめる無料イベント「ブリッジパーティー」を八王子労政会館で開催した。ジュニア 11 名（未経験者 6 名、経験者 5 名）と保護者など大人 5 名が参加した。

開催回数：13 回（四谷 BC8 回、横浜 BC2 回、京葉 BC1 回、その他 2 回）、

延べ参加者数：56 名

3. 橋之介道場シリーズ（支出 133 千円／予算 444 千円）

橋之介道場シリーズでは、年齢及び経験別に、ミニブリッジが初めてまたは 2 回目のジュニアを対象とする「橋之介ミニひろば（参加料 200 円）」、ブリッジが久しぶりのジュニアまたはミニ道場入門前のジュニアを対象とする「プレ道場（参加料 200 円）」、ミニブリッジに慣れてきた小学校中学年以上のリピーター層を対象とする「ミニ道場（参加料 300 円）」という 3 つの異なるプログラムを展開してきたが、本年度より「ミニひろば」を廃止した。初めての方は「体験教室」、2 回目の方は「プレ道場」に参加できるようにした。四谷・横浜地区で、原則月 1 回程度、日曜日の午前と午後に開催している。

「スペシャル大会（参加料 500 円）」は、四谷ブリッジセンターと京葉ブリッジセンターで各 1 回、横浜ブリッジセンターで 2 回開催を予定していたが、四谷分と横浜分 1 回が成立しなかった。

開催数： ①プレ道場 4 回（四谷 BC1 回、横浜 BC3 回）、延べ参加者数：11 名

②ミニ道場 6 回（四谷 BC3 回、横浜 BC3 回）、延べ参加者数：20 名

③スペシャル大会 2 回（横浜 BC・京葉 BC 各 1 回）、延べ参加者数：15 名

4. ジュニアキャンプ／プレユースキャンプ（支出 459 千円／予算 677 千円）

本年度は、1泊2日の「ジュニアキャンプ」に加え、長期リピーター向けの上級プログラムとして、2泊3日の「プレユースキャンプ」を併催した。また、より多くジュニアの参加を促すため、今年度は、参加料の兄弟割引を実施した（兄弟で参加の場合は、2人目以降につき2,000円割引）。

会場： 高尾の森わくわくビレッジ（八王子市）

スタッフ： 講師2名、アシスタント3名、ボランティアスタッフ4名、事務局1名

(1) ジュニアキャンプ

日程： 7月29日～7月30日、1泊2日

対象： 小3～中3のジュニアくらぶ会員

参加者数： 小学生10名（内1名は保護者同伴の小1）、保護者1名

参加料： 11,000円（保護者同伴の小1は9,000円）

(2) プレユースキャンプ

日程： 7月28日～7月30日 2泊3日
（2日目からジュニアキャンプ参加組と合流）

対象： 中学生以上のジュニアくらぶ会員

参加者数： 中学生5名

参加料： 16,000円

5. ミニブリッジ大会「ハシノスケ杯」の開催（支出 10 千円／予算 30 千円）

前年度末に京葉地区で開催を予定していた「ハシノスケ杯」が、東日本大震災発生の影響により開催保留となったため、これに代わる大会として、「八千代台ブリッジサロン・スペシャル大会」を、8月24日に開催した。夏休み中だったこともあり、ジュニア9名、保護者や会友など一般6名、計15名の参加があった。参加料500円。

6. 第3回ジュニアミニブリッジチーム選手権試合（支出 34 千円／予算 83 千円）

残念ながら、本戦のチーム選手権は、参加申込み数が少なく開催を中止した。サイドゲームの「マクブリッジ杯」には、本戦に参加を希望していたジュニアを含む、9名（フローター1名を含む5ペア）の参加があった。参加料750円。

7. 集中講座（支出 164 千円／予算 232 千円）

高学年のヘビーリピーターを対象にレッスнтаイプのイベントを新設した。ブリッジのオークションや技術を集中的に学ぶ機会を提供し、子どもたちのブリッジに対する知的好奇心の持続を後押しするとともに、技術向上とコントラクトブリッジへの移行を促すことを目的としている。本年度は7月と3月の2回、横浜ブリッジセンターで開催した。

参加者数：7月4名、3月5名、参加料：1コマあたり500円（教材付）。

8. その他のジュニア関連イベントへの協力 ※ 経費はジュニア部会勘定外

- 横浜ブリッジセンター主催「第4回横浜ミニベイブリッジフェスティバル杯（5月1日、横浜ブリッジセンター）：企画・PR支援、ディレクター派遣、賞品提供
参加者数：16名
- 日本ペア碁協会主催「第6回関西ジュニア・ペア碁大会（9月1日、京セラドーム）」：ミニブリッジ体験教室開催、スタッフ派遣、カード・グッズ提供

- 日本棋院中部総本部主催「夏休みジュニア&プロふれあい囲碁まつり（8月20日、会場：日本棋院中部総本部）」：ミニブリッジ体験教室開催、スタッフ派遣、賞品提供
- 文部科学省主催「霞が関こども見学デー」（8月17～18日、文部科学省）」：体験コーナー出展、スタッフ派遣、カード提供
- めぐみ野サロン（八王子）：講師助成

広報部 【収入 315 千円／予算 1,115 千円、支出 25,482 千円／27,202 千円】

1. ブリッジ普及広報宣伝活動（収入 315 千円／予算 1,115 千円、支出 6,873 千円／11,101 千円）

(5) 中長期戦略策定のための調査の実施

全国及び海外の公認クラブ、ブリッジ同好会を対象に、アンケート形式で、「コントラクトブリッジに関する調査」を実施した。

目的： 全国のブリッジクラブにおける活動状況の実態とニーズを総合的な観点から調査し、普及・広報・競技会分野における今後の事業戦略策定に役立てる。

実施時期： 平成 23 年 11 月 20 日～12 月 10 日

対象： 全国及び海外の公認ブリッジクラブ、ブリッジ同好会（クラブ数 108）
（ブリッジセンターは存在・活動形態がかなり異なるため、本調査の対象からは除外）

調査項目： ブリッジクラブの概要、ゲーム運営の状況、及び初心者に対する普及活動の実施状況

(6) 媒体への広告掲載

前年度に引き続き、媒体広告は、「ブリッジ一般・イメージ広告（ブリッジの認知やイメージを高めるための広告）」と「イベント告知広告（体験教室などの開催告知）」の二本立てで実施した。平成 22 年度に日経 BP 広告賞優秀ライフスタイル賞を受賞したイメージ広告は新たに APBF コングレス福岡大会バージョンを含む 3 種類を制作し、同大会の PR に活用している。

「ブリッジ一般・イメージ広告」については、より高い効果が期待される、50 代・60 代の男女をターゲットとする情報誌や、ブリッジと愛好者層が重なるパズルなどの趣味誌を中心に展開した。実施にあたっては、徹底して実施費用の低減に努め、常に費用対効果の向上に留意した。

① ブリッジ一般・イメージ広告

月刊誌：	「日経おとなの OFF」 7・8 月号、11～3 月号	7 回
	「和楽」 5 月号	1 回
	「ミセス」 6 月号、9 月号	2 回
趣味誌：	パズル誌 14 誌 8～9 月、12～1 月（2 回）	2 回
	旅行読売「ひとり旅」 7 月号臨時増刊	1 回
機関誌：	「はれ予報」 5 月号、7・8 合併号、9 月号、 11 月号、1・2 月合併号	5 回
	クラブツーリズム「STYLE」	1 回
	ないすらいふ 2011 年版	1 回
ムック誌	日経ムック「新年金世代のココロザシゴト」	1 回
週刊誌	週刊ポスト 情報 BOX	1 回
その他	杉並区民オペラ第 7 回公演プログラム	1 回

② イベント告知広告

新聞：	産経新聞（大阪本社版）	8月30日	京都国文祭・OBC 体験教室
	朝日新聞大阪本社版(夕刊)	10月20日	京都国文祭・OBC 体験教室
	朝日新聞朝刊 東京本社版	1月27日	NECBF 普及イベント
情報紙：	「リビングふなばし・ならしの」		こども体験教室
		9月3日	
	「リビング京都中央」	10月22日	京都国文祭・OBC 体験教室
	沖縄「レキオ」	12/1号	沖縄体験教室
	「リビング横浜東・横浜南・田園都市」		NECBF 普及イベント
		2月4日	

(7) ブリッジ動画製作

中期事業計画立案体制の変更及び高橋普及事業部長の退職に伴い、来年度に新事業部長が着任した後に普及事業全体の中長期的事業方針を改めて検討することにしたため、本年度事業として予定していた「ブリッジゲームの基本的流れ」を紹介する動画の制作は実施しなかった。

(8) その他

このほか、以下の広報事業を実施した。

- プレスリリース作成・配信・ウェブサイト掲出：7本
- 広告関連調査活動

広告宣伝効果や世間一般におけるブリッジの浸透度を把握するため、メディアでのブリッジの露出回数調査を継続した（調査方法：クリッピングサービス）

メディア露出回数：新聞・雑誌など、計72回、総発行部数：約4400万部～

（全国紙9回、全国紙地方版・地方紙41回、夕刊紙・雑誌・その他22回）

注：「ブリッジ」をキーワードに設定し、クリッピングサービス会社が集めた記事の出現回数

- ブリッジクラブなどが主催または参加するイベントの広報活動支援

本年度は、ブリッジセンターやブリッジクラブに対する広報支援事業を新たに開始した。1件5万円程度、年間10件までを上限に、イベント告知広告費用、看板掲出費用等を助成する。本年度は4件の申込みがあり、総額29万円の支援を行った。

- ブリッジ図書寄贈プロジェクト

10月に国民文化祭が行われた京都市と、姫路市、芦屋市など関西地区のベッドタウン地域を中心に、69の図書館を選んでブリッジ書籍の寄贈申入れ書を送付、回答のあった6館へ「ブリッジ入門」（水谷宮三著）11冊を寄贈した。

2. ブリッジに関する出版物の刊行（支出10,807千円／予算10,170千円）

定款第5条(7)に定められた「コントラクトブリッジに関する出版物（電子的なものを含む）の発行及び資料の収集と管理」に基づき、次の出版物を編集・発行した。発行部数の少ないミニハンドブックと要覧は事務局内で製作・印刷するなど、費用の低減に努めている。

- 会報「JCBLブリテン」 年6回奇数月1日発行、各7,300部
- 「JCBL HANDBOOK」 5月1日発行、7,300部
- 初心者向け「ミニハンドブック」 必要に応じてその都度印刷
- 「JCBL要覧」 必要に応じてその都度印刷

3. 広報ツールの製作 (支出 984 千円／予算 977 千円)

ブリッジの普及活動及び認知度向上に広く活用するため、以下の広報ツールの企画・製作・購入・配付を行った。

- 普及活動及び会員サービスとして活用可能な廉価なグッズの製作・購入
- 広報用素材イラストの製作 (橋之介ファミリー&フレンズ、9 点)
- オリジナル年賀状の製作と印刷 (1,200 枚)
- 「Let's Play Bridge」ミニパンフレット増刷 (10,000 部)
- ブリッジ紹介 DVD のコピー版製作 (50 枚)
- イメージポスター増刷 (300 部)
- イベント用のぼりの追加製作

4. ウェブサイトの運営 (支出 6,816 千円／予算 4,954 千円)

前年度から進めていた JCBL サイト全面リニューアルのための準備作業を継続し、平成 24 年 2 月から新サイトの公開を開始した。CMS への移行により随時更新が可能となったことから、競技会情報やイベント開催情報などの更新頻度を増やして、タイムリーな情報公開・発信に努めた。

新サイトに関するユーザーの感想や反応を把握して今後のコンテンツ制作に活用するため、リニューアル直後にサイト上でアンケート調査を実施した。会員・会友 18 名を含む、23 名のユーザーからの回答があった。

支出が予算を約 200 万円超過した原因は、主として業者に移行作業を依頼するページの分量が当初見積りを大幅に上回ったことによる。

管理費 【支出 27,258 千円／32,006 千円】

1. 各種講習会への会場の提供

2. その他目的達成に必要な下記経費

職員給料／臨時雇賃金／退職給付／福利厚生費／旅費交通費／通信運搬費／消耗品費／会議費／図書資料費など、普及・出版・広報活動に必要な経費

以 上

競技会事業部

【収入 166,487 千円／予算 180,410 千円、支出 76,766 千円／予算 78,388 千円】

1. コントラクトブリッジ競技会の主催と公認

【収入 166,487 千円／予算 180,410 千円、支出 42,545 千円／予算 42,729 千円】

競技会の開催と公認については、本年度は以下の事業を実施した。

(1) 競技会的主催（収入 47,957 千円／予算 52,052 千円）

1) ナショナル（全国大会）競技会（収入 29,710 千円）

競技会名	日 程	参加卓数	(前年度)
玉川高島屋S・C杯	4月16、17日	87	(86)
文部科学大臣杯関東予選	5月7、8、14、15日	67	(65)
藤山杯	7月2、3日	116	(126)
外務大臣杯	8月20、21日	58.5	(62.5)
高松宮記念杯	9月17、18、19、24、25日	107	(105)
全日本女子ペア選手権	10月1、2日	115.5	(128)
高松宮妃記念杯	11月5、6日	90	(86.5)
NISSANブルーリボン杯	12月23日	108	(115.5)
エンゼル・レッドリボン杯	12月23日	37	(38.5)
朝日新聞社杯	1月 7、8、9日	160	(162)

2) リジョナル競技会（収入 16,608 千円）

競技会名	日 程	参加卓数	(前年度)
柳谷杯	4月2、3日	116	(131)
サントリー杯	4月29日	108	(117.5)
野崎杯（新設）	4月30日	18	
井上杯（旧日本航空杯）	5月28、29日	52	(65)
井上歌子杯（新設）	5月29日	23.5	
モンタルト杯	7月23、24日	36	(35)
丸の内杯決勝(予選非開催)	8月27日	5	(8)
夏季シニアペア	8月27日	17	(18)
夏季シニアチーム	8月28日	12	(13)
萩原杯	10月15、16日	90	(101)
服部杯	12月7日	160	(148.5)
春季リジョナル	3月17、18日	32	中止
渡辺杯	3月24、25日	48	(42)

3) 日本リーグ（収入 3,320 千円）

日本リーグ1部、2部	前期4、6月、後期12、1月	40	(40)
------------	----------------	----	------

4) 社会人リーグ（収入 270 千円）

社会人IMPリーグ	11月～3月	15	(16)
-----------	--------	----	------

5) 参加料割引（△1,946 千円）

(2) 競技会の公認

(収入 115,563千円／予算 125,698 千円)

- | | | |
|--|--------|------------|
| 1) ナショナル競技会 (収入 1,218 千円) | | |
| NRM 杯、任天堂杯並びに主催ナショナル競技会
予選を含む20競技会を公認 | 177 | (117.5) |
| 2) リジョナル競技会 (収入 5,410 千円) | | |
| 主催リジョナル競技会予選を含む35競技会を公認 | 1,168 | (1,408) |
| 3) セクショナル競技会 (収入 96,272 千円) | | |
| 1,989競技会を公認 | 33,166 | (32,288.5) |
| 4) ローカル競技会 (収入 1,576 千円) | | |
| 390競技会を公認 | 2,784 | (3,024.5) |
| 5) IMP リーグ (収入 27,098 千円) | | |
| 5月～9月 | 2,430 | (2,552) |
| 11月～3月 | 2,374 | (2,501) |
| 6) クラブ選手権 (収入 6,451 千円) | | |
| 1,137競技会を公認 | 9,751 | (10,307) |
| 7) 参加料割引 (△22,463 千円) | | |

本年度は、東日本大震災の影響で打撃を受けた被災地の公認ブリッジクラブ及び首都圏のブリッジセンターを対象に震災関連支援策を実施した。被災地の宮城県及び茨城県のブリッジクラブについては、本年度のクラブ会費及び震災が発生した昨年3月11日から本年度末までの期間の競技会公認料を免除した。首都圏のブリッジセンターについては、震災発生日から1ヶ月間のセクショナル競技会公認料の半額を払い戻す形で、助成を行った。

(3) ウィークリー収入 (収入 2,967 千円／予算 2,660 千円)

(4) 競技会の主催と公認事業 (支出 42,545 千円／予算 42,729 千円)

上記競技会の開催と公認及びマスターポイント制度の確立と実施のために必要な経費を支出した。

今年度認定したマスター位の人数は以下の通り

ダイヤモンドライフマスター：	0名
ゴールドライフマスター：	19名
シルバーライフマスター：	36名
シニアライフマスター：	123名
ライフマスター：	160名
シニアマスター：	175名
ナショナルマスター：	183名
マスター：	209名
ジュニアマスター：	206名

2. 競技会の水準向上のための講習会等の開催【支出 4,309 千円／予算 5,983 千円】

競技会の水準と環境の向上のためのディレクター講習会の開催、競技会運営ソフトの開発などについては、本年度は以下のような事業を実施した。

(1) ディレクター講習会 (支出 170 千円)

クラブディレクター講習会を四谷ブリッジセンター及び横浜ブリッジセンターで計2回

開催した。

7月 2日（東京）：受講者 15名

3月 17日（横浜）：受講者 20名

(2) 競技会運営システムの保守（支出 2,596 千円）

平成 14 年度から開発を開始した競技会集計ソフト（JTOS）については、本年度はスコア集計端末 Bridgemate に対応したバージョン 3.0 を 8 月にリリースした。

バージョン 3.0 は平成 24 年 3 月末現在 171 件のダウンロード及び 38 件の CD での配付があった。

(3) ブリッジライブラリー運営事業（支出 340 千円）

定款第 5 条(7)に定められた「コントラクトブリッジに関する出版物（電子的なものを含む）の発行及び資料の収集と管理」について、本年度は次のような事業を行った。

- ・ブリッジ関係の書籍を購入した。
- ・ブリッジ雑誌の製本と破損書籍の修理を行った。

(4) 公認クラブ支援（支出 417 千円）

本年度は地方クラブ会議出席者に対して支援及び要望・意見などの聴取を行ったほか、地方リジョナルにディレクターを派遣し、ディレクター費及び交通宿泊費の助成を行った。

(5) 競技委員会（支出 222 千円）

委員会を 5 回、ほかに小委員会を開催し、競技会における裁定、コンベンション規定、J CBL HANDBOOK の記載内容などの検討を行った。

ディレクター資格認定者数：セクショナルディレクター 2 名、

クラブディレクター：16 名

(6) ルール委員会（支出 0 千円）

本年度は活動がなかった。

(7) センターサービス向上委員会（支出 134 千円）

防災マニュアル及び立命館大学のマニュアルをもとに救急対応マニュアルを作成し、常設会場に配付した。

ガイドライン及びマニュアル類の整備が完了したため、センターサービス向上委員会は活動を終息し、意見書対応、ガイドラインのメンテナンス、AED 設置支援、会場環境向上支援、緊急連絡システムの運用など、ゲーム環境向上のための支援事業は事務局で引き継いだ。

(8) ナショナルディレクター養成（支出 428 千円）

ナショナルディレクター養成のための実習・試験などを行ったが、本年度はナショナルディレクター推薦者が出なかった。

3. その他競技会事業部の目的を達成するための事業【支出 29,911 / 予算 29,676 千円】

競技会事業部の目的を達成するために必要な人件費、交通費、消耗品費、印刷製本費、賃借料など

国際交流事業部

【収入 12,809 千円／予算 15,430 千円、支出 42,105 千円／予算 49,924 千円】

1. 国際試合へ日本代表の派遣と選抜

【収入 450 千円／予算 990 千円、支出 8,986 千円／予算 12,375 千円】

定款第5条(6)に定める「コントラクトブリッジを通しての国際交流」については、本年度は以下の事業を実施した。

(1) 第48回アジアパシフィックブリッジ連合(APBF)選手権マレーシア大会への代表派遣及び運営協力 (支出2,642千円／予算2,067千円)

会 期：平成23年6月14日～24日

会 場：クアラルンプール、マレーシア

事業内容：① オープン、ウィメンズ及びシニアの代表チーム派遣

オープンチーム（キャプテン三浦裕明、メンバー井野正行、今倉正史、寺本直志、加来浩、古田一雄、横井大樹）は参加13ヶ国中3位に入賞し、プレイオフ1回戦でシンガポールに勝って世界選手権への出場権を獲得した。

ウィメンズチーム（キャプテン伊藤陽一、メンバー西田奈津子、坂本みどり、島村京子、伴野和子、高崎恵、柳澤彰子）は12ヶ国中3位に入賞したが、プレイオフでインドネシア、チャイニーズ・タイペイに敗れ、世界選手権の出場権を獲得できなかった。後日チャイニーズ・タイペイが世界選手権出場を辞退したため、日本が代わって出場した。

シニア山田チーム（大野京子、山田彰彦、中村嘉幸、吉田正、平田眞）は10ヶ国16チーム中2位に入賞し、プレイオフ1回戦でチャイニーズ・タイペイに勝って世界選手権への出場権を獲得した。

日本から出場したその他のシニアチームの成績は、内藤チーム（キャプテン宮国亜矢子、メンバー宮国健次、内藤佐紀子、逸見徹、田多井菊雄、徳永幸子、太田裕子）が6位、山口チーム（山口知也、桐山文子、西村輝子、Tan瑞子、浅越ことみ、黒川晶夫）が13位であった。

事業内容：② 代表チームへの助成

オープン及びウィメンズチームには、航空運賃、宿泊費のほか、大会前のナショナル競技会参加料及び練習会費用の助成を行った。

事業内容：③ APBF代表者会議へ役員派遣

大会期間中に開催されたAPBF代表者会議に、中谷忠義理事がAPBF幹事長、大政哲人事務局長がAPBF事務局、寺本直志理事が代表委員として出席した。

事業内容：④ 大会運営スタッフの派遣

事務局から大政哲人及び仲村篤志の2名をスコアリングスタッフとして派遣した。連盟が開発した集計ソフトJTOS及びスコア入力端末 Bridgemate を日本から持ち込み、これらを使用して大会運営に協力した。

(2) 世界チーム選手権への代表派遣（支出5,363千円／予算7,958千円）

会 期： 平成23年10月15日～29日

会 場： フェルトホーフエン、オランダ

事業内容： ① 代表チームの派遣

第48回APBF選手権で代表権を獲得したオープンチームとシニア山田チーム、並びに、チャイニーズ・タイペイに代わり代表権を得たウィメンズチームを日本代表として派遣した。

オープン（キャプテン三浦裕明、メンバー井野正行、今倉正史、寺本直志、加来浩、古田一雄、横井大樹）は22チーム中9位、ウィメンズ（キャプテン伊藤陽一、メンバー西田奈津子、坂本みどり、島村京子、伴野和子、高崎恵、柳澤彰子）は22チーム中14位、シニア（大野京子、山田彰彦、中村嘉幸、吉田正、平田眞）は22チーム中17位で、いずれも決勝トーナメント進出はならなかった。

事業内容： ② 代表チームへの助成

代表チームに対し、航空運賃と宿泊費のほか、練習会費用の助成を行った。

(3) 第2回ワールドマインドスポーツゲーム（WMSG）日本代表選抜試合

（収入450千円／予算990千円、支出448千円／予算940千円）

会 期： 平成23年11月12,13日、12月10,11日（オープン、ウィメンズ）

会 場： 四谷ブリッジセンター

事業内容： ① 代表チームの選抜

平成24年8月9日～23日にリール（フランス）で開催される第2回WMSGに参加するオープン、ウィメンズ、シニア各1チームを選抜した。

オープンは2チーム12名が参加し、井野正行、今倉正史、花山武志、寺本直志、加来浩、古田一雄の6名を代表に選抜した。

ウィメンズは3チーム18名が参加し、太田裕子、丸山洋子、福吉由紀、柳澤彰子、大手瑠利、宮国亜矢子の6名を代表に選抜した。

シニアは1チーム6名のみの参加申込であったため、選抜試合を行わず、阿部弘也、大野京子、中村嘉幸、平田眞、山田彰彦、吉田正の6名を代表に決定した。

② 選抜試合参加者への交通費と宿泊費の助成

選抜試合参加者に対し、交通費及び宿泊費の助成を行った。

③ 代表チームへの国内試合参加料、練習会費用の助成

ウィメンズ及びシニア代表チームに対し、NEC杯参加料を助成した。

(4) 代表チームユニフォーム助成（支出845千円／予算560千円）

事業内容： 第48回APBF選手権及び世界チーム選手権の日本代表チームのキャプテン及びメンバーに、ジャケットとエンブレム、スラックスまたはスカート、及びポロシャツを支給した。

(5) 国際試合への派遣（支出261千円／予算275千円）

事業内容： 各国ブリッジ組織から日本代表チームへの招待があった場合、チームを派遣する。本年度は、平成23年4月18日～22日に無錫（中国）で開催されたYeh Bros Cupに、日本オープンチームのメンバー5名（井野正行、今倉正史、寺本直志、古田一雄、横井大樹）を派遣し、航空運賃及び参加料の助成を行った。

2. 第17回 NEC ブリッジフェスティバルの開催

【収入 9,032 千円／予算 11,240 千円、支出 23,072 千円／予算 24,514 千円】

会 期： 平成24年2月7日～12日

会 場： パシフィコ横浜

事業内容： 国外の一流チームを招待して日本人プレイヤーの技量向上と国際交流の促進を図る。

① NEC杯：平成24年2月7日～11日

（収入1,885千円／予算2,400千円）

世界10ヶ国・地域からのプレイヤーで構成される15チーム（英国／オランダ、英国／アイルランド、ブルガリア×2、オーストラリア、オーストラリア／ニュージーランド、英国ウィメンズ、インドネシアウィメンズ、チャイニーズ・タイペイ、中国ウィメンズ＝以上招待チーム、中国×3、韓国×2）、国内参加31チームの合計46チームが参加した。3日間の予選ラウンドの後、2日間の決勝ラウンドを行い、オーストラリア／ニュージーランド混成のDown Underチーム（Sartaj Hans, Tony Nunn, Martin Reid, Peter Newell）が優勝した。

② 横浜IMPペア：平成24年2月10日（収入244千円／予算0円）

40ペア参加、Gu Ling－Lu Yanペア（中国）が優勝

③ 横浜スイスチーム：平成24年2月11日

（収入1,080千円／予算2,040千円）

67チームが参加、Chen Yeh, JuiYiu Shih, ChiMou Lin, Herstein Liu, Patrick Huang, Grace Linチーム（チャイニーズ・タイペイ）が優勝した。

④ 飛鳥杯：平成24年2月12日（収入1,065千円／予算1,300千円）

162ペアが参加、Julian Stefanov－Vladimir Mihovペア（ブルガリア）が優勝した。

⑤ BIGLOBEシリーズ：平成23年9月～12月

（収入3,944千円／予算5,000千円）

29クラブで424回開催、延べ15,466名が参加した。

⑥ ミニブリッジ体験教室の開催（普及事業部扱い）

3. 2012APBF コングレス福岡大会開催準備作業

【収入 3,326 千円／予算 3,200 千円、支出 7,342 千円／予算 9,856 千円】

事業内容： 平成24年8月25日から9月2日にかけて福岡で開催予定のAPBFコングレス福岡大会の準備作業

同大会の準備作業及び平成23年7月9、10日に開催したプレ大会の運営支援を行った。また、APBFファンゲームを開催し、プレ大会への参加助成を行った。

4. その他国際交流事業の目的を達成するための事業

本年度は、国際交流事業の目的を達成するために必要な事業として、以下の事業を実施した。

- (1) 世界同時大会への参加（収入187千円 ※競技会事業部公認料収入）
平成23年6月3日及び4日に開催された世界同時大会開催に参加協力した。
6月3日（金）＝12クラブ、498名参加
6月4日（土）＝10クラブ、314名参加
- (2) APBF同時大会への参加（収入261千円 ※競技会事業部公認料収入）
平成23年11月～平成24年4月まで毎月第1金曜日／土曜日に開催されたAPBF同時大会開催に参加協力した。
11月＝17クラブ、508名参加
12月＝15クラブ、512名参加
1月＝18クラブ、600名参加
2月＝16クラブ、538名参加
3月＝14クラブ、464名参加
(4月＝17クラブ、508名参加)
- (3) 海外競技会に参加する会員の支援と海外への情報提供と収集
 - ① ACBLとの提携の継続・強化：ACBL競技会を会報で紹介
ACBLナショナル日程を会報及びJCBLホームページに掲載した。
 - ② APBF加盟国の競技会開催情報の提供
JCBLホームページの到着情報からAPBF選手権のページにリンクして、アクセスを容易にした。
香港インターシティ、ASEANクラブ選手権などの開催情報を会報及びJCBLホームページに掲載した。
 - ③ WBF加盟国の競技会開催情報の提供
JCBLホームページの到着情報から世界選手権のページにリンクして、アクセスを容易にした。
ポルトガル・アソーレス諸島でのブリッジトーナメントほかの情報を会報及びJCBLホームページに掲載した。
 - ④ JCBLホームページを通して海外に情報を提供するとともに、ブリッジ関連ホームページから情報を収集し、会員に提供する。
年間主要競技会予定とNECブリッジフェスティバルの英文情報をウェブサイトで公開した。
英文のNECブリッジフェスティバル開催案内のチラシを作成し、ACBLナショナル、世界選手権の会場で配付した。
- (4) その他目的達成に必要な経費（支出2,703千円／予算3,179千円）
交通費、通信費、会議費等の国際交流事業に必要な経費を支出した。

その他の事業

1. その他連盟の目的を達成するための管理部門を含む事業

【支出47,134千円／予算51,297円】

本年度は、目的を達成するために必要な事業として、以下の事業を実施した。

(1) 事務局（一般管理費）の維持

理事会の管轄の下に事務局を設置して諸事業活動を支援した。

平成23年度重要業務及び関連事項

- 4月 1日 職員に平成23年度辞令交付
新日本有限責任監査法人による現金実査、商品棚卸実施
- 16日 新日本有限責任監査法人、監事立ち会いで平成22年度決算書作成、監査
- 20日 文化庁長官官房政策課に文部科学大臣杯名義使用許可願いを提出
- 5月 2日 第30回会員総会開催通知発送
- 5月28日 第30回会員総会開催、253名参加
「定款」、「会員規則」、及び「会友規則」の改正案、「役員
の報酬および費用に関わる規則」案を付議、全会一致で可決さ
れた
- 5月31日 平成22年度決算書を四谷税務署、新宿都税事務所に提出
- 6月28日 文化庁文化部芸術文化課に、平成22年度事業報告及び収支決
算報告書、平成23年度事業計画及び収支予算届を提出
- 8月23日 文化庁長官官房政策課に文部科学大臣杯終了届を提出
- 9月28日 内閣府公益認定等委員会事務局に移行認定申請書を提出
- 11月30日 文化庁文化部芸術文化課に特例民法法人現状調査票を提出
- 12月22日 公益認定等委員会委員長より移行認定の答申書が発行された
- 3月21日 内閣総理大臣より公益社団法人への認定書が発行された

(2) 収益事業の運営（収益事業特別会計に計上）

1) 商品販売事業

ブリッジ用品及び書籍の販売と仕入れを行った。収支については収益事業決算書を参照されたい。

2) 四谷ブリッジセンターとの提携

NPO法人四谷ブリッジセンターとの業務契約書に基づいて協同して会場施設の運営とブリッジの普及・振興に務めた。

(3) 基金の運用

チャリティ基金

各種団体に次のとおり寄付した：

高松宮妃癌研究基金	200,000円
全国視覚障害者雇用促進連絡会	200,000円
プラン・ジャパン	200,000円
癌研究会	150,000円
朝日新聞厚生文化事業団	100,000円
讀賣光と愛の事業団	100,000円
日本赤十字社	100,000円
日比パガサの会	100,000円
アイメイト協会	100,000円
あしなが育英会	100,000円
日本イコモス国内委員会	100,000円
Room to Read	100,000円
横浜音声訳グループやまびこ	50,000円
国連WFP協会	50,000円
東日本大震災義援金	72,000円
合計	1,722,000円

※東日本大震災義援金は高松宮記念杯コンソレーション参加料を充当

※基金残高1,375,464円に一般会計より346,536円を拠出

九州支部

1. 総括

設立 6 年目となった今年度は、第 7 回 APBF コングレス福岡大会の成功を中期的な目標としてブリッジの普及事業・広報事業に一段と力を入れ、また、地元福岡で組織された外部支援組織である「APBF2012 福岡委員会」とともに支援事業の具体的検討を進めてきた。

2. 主な取組みと成果

(1)普及事業

4 月より福岡大学経済学部で JCBL 九州支部提供講座「特別演習 I : 国際人の教養！コントラクトブリッジを学ぶ！！」を開講した。また、同学部山崎好裕教授のオムニバス講座「文化と教育」の 1 コマでブリッジについて講義を行った。5 月からはインターナショナルエアアカデミー（キャビンアテンダントの専門学校）においても講座を開講した。

公立中学校の課外活動にも拡がりがあり、今年度は長尾中学校区合同の文化交流会のテーマとしてブリッジを選択していただき、体験教室を開催した。

継続的な取り組みとしては、福岡ブリッジプラザでの土曜サロンやミニブリッジ大会「緒方杯」の開催、山笠ブリッジ祭り及び九州リジョナル・西日本新聞社杯の併催イベントとしての体験教室開催などを行った。

広報活動では、多くの方々のご協力をいただきながら支部会報 10 号を発行した。支部会報は、福岡市文化振興課のご協力を得て福岡市内のすべての公立小・中学校、公民館等へ配布したほか、地元関係者、さらには全国のブリッジ関係者にも配布した。支部会報に加え、連盟会報「JCBL BULLETIN」上の「九州支部だより」コーナーを活用した情報発信も、昨年を引き続き行った。

APBF 関係では、本大会を次年度に控え、地元福岡の大会支援組織、「APBF2012」福岡委員会との協力を強め、福岡委員会主催歓迎イベント（はッピーサマーナイト）の立案や協賛金等の協力を得た。そのほか協力をお願いしている文化団体との協議など、着実に準備が進んでいる。

(2)競技会事業

7 月初旬に開催している山笠リジョナル・テレビ西日本杯に、今年度から新たに福岡市長杯を加えることができた。またこれに伴い、大会名称を「山笠ブリッジ祭り」と改称した。本年度は特に APBF プレ大会と位置付けて、コンGRESS 大会同様、ヒルトン福岡シーホークで開催し、多くの参加者を得ることができた。海外チームとの交流のため、韓国から 2 チームを招待した。

主な活動事業

■社会教育・学校教育での普及活動（ミニブリッジ一日体験教室開催等）

熊日生涯学習プラザ(全6回)	前年度～5月22日	15名参加
福岡大学経済学部提供講座	4月12日～1月10日	51名履修
インターナショナルエアアカデミー講座	5月12日～2月9日	45名履修
福岡大学経済学部オムニバス講座	5月17日	約350名出席
山笠ブリッジ祭り体験教室	7月9日	12名参加
佐賀市歴史民俗館 体験教室	8月6日～8月7日	11名参加
長尾中学校区文化交流会	9月17日	92名参加
西日本新聞社杯体験教室	3月3日	6名参加

■広報活動

支部会報 第10号 2NT（ツーンोटランプ） (8月1日発行)

■主催大会実績

競技会名	開催日	会場	参加数
ミニブリッジ大会「緒方杯」	4月2日	福岡ブリッジプラザ	8ペア
第1回福岡市長杯	7月9,10日	ヒルトン福岡シーホーク	22チーム
第4回テレビ西日本杯	7月10日	ヒルトン福岡シーホーク	50ペア
第6回西日本新聞社杯 (九州リジョナルペア戦)	3月4日	福岡交通センター	44ペア

■主催サロン

名称	開催日	会場	参加数
土曜サロン	第1第3土曜日	福岡ブリッジプラザ	延198名

福岡ブリッジプラザ

1. 総括

今年度は、APBF コングレス福岡を来年に控え、大規模なプレ大会が開催された。また、来年度に向けてプラザの収支を均衡させるという目標に向け、従来からの活動を充実させながら事業を継続してきた。

収入については、予算 10,391 千円に対して決算 10,457 千円で、ウィークリー収入が計画を下回ったものの、会場費収入は計画を上回った。支出は、予算 11,495 千円に対し決算 11,500 千円であった。講師への謝礼などが計画をやや上回ったものの、臨時雇賃金などが計画より少なかったため、結果としてほぼ予算どおりとなった。収支は 1,043 千円の赤字となったが、前年度に比べて赤字幅は約 1,200 千円改善した。

組織的な運営体制の構築については、残念ながら、本年度も人材確保など種々な課題を解決することができなかった。プラザ独立のためには組織的な運営体制の確立が不可欠であり、来年度はこの課題に特に重点を置いて取り組んでいく。

2. 主な取り組みと成果

個別事業を見ると、普及活動の起点となる無料体験教室の参加者を計画どおりに確保することができなかった。この影響により、入門講習会の受講者数も計画を若干下回った。

サロンについては、計画の半分も達成できなかったため、人気が高いプレイ、コンベンションなど、具体的なテーマを設定した講習会に近いメニューを増やす必要がありそうである。但し、講師などの人材確保と講習会とのバランスの調整が課題となってこよう。

レベルアップ講習会では、入門講習会修了者に対して経過 6 ヶ月毎にメニューを用意しており、概ね 24 ヶ月位まではステップアップできるシステムとなっている。中級講座では特定テーマを設けていることが奏功し、ほかの講習会に比べ参加者が多くなってきている。通常の講習会は終えたが、独学できるほど力をつけていない層が結構厚いと思われるので、この層を対象とするメニューを用意すべきであろう。

[主な事業活動]

1. 普及事業

(1) 無料体験教室

9月の体験教室：参加 22名（計画 20名） 知人の紹介 17名、タウン誌 5名

3月の体験教室：参加 5名（計画 20名） 知人の紹介 5名

(2) 入門1講習会

4月～9月の入門講習会：10名受講（計画 10名）知人の紹介 8名、タウン誌 2名

10月～3月の入門講習会：6名受講（計画 10名）知人の紹介 6名

(3) サロン

月曜～金曜延べ 687名（計画 1,500名）

(4) レベルアップ講習会等

入門2（6ヶ月経過）：年間延べ 143名（計画 200名）

初級1（12ヶ月経過）：年間延べ 124名（計画 200名）

初級2（18ヶ月経過）：年間延べ 179名（計画 200名）

中級（上級を目指す）：年間延べ 837名（計画 500名）

2. 競技会事業

(1) ウィークリーゲーム

月曜午後：平均 3 テーブル 延べ 642 名（計画 700 名）
火曜午後：平均 2.5 テーブル延べ 480 名（計画 700 名）
水曜午後：平均 4.5 テーブル延べ 884 名（計画 700 名）
金曜午後：平均 2.5 テーブル延べ 350 名（計画 0 名）※ 7 月から実施

(2) ローカル

土日ローカル：月 2 回 平均 8 テーブル 延べ 766 名（計画 760 名）
火曜ローカル：月 1 回 平均 3.5 テーブル 延べ 184 名（計画 240 名）
金曜ローカル：月 1 回 平均 6.2 テーブル 延べ 400 名（計画 300 名）

(3) IMP リーグ

新人リーグ（火曜）： 5+5=10（計画 6 チーム×2）
新人リーグ（水曜）： 4=4（計画 0 チーム）※ 冬季から実施
火曜リーグ： 0+0=0（計画 4 チーム×2）
金曜リーグ： 5+6=11（計画 6 チーム×2）
土日リーグ： 5+4=9（計画 6 チーム×2）

(4) セクショナル

オープンチャンス： 6 回 52 テーブル（計画 6 回）
ハンディキャップペア： 1 回 4 テーブル（計画 2 回）
新人セクショナル： 0 回 0 テーブル（計画 1 回）
その他： 9 回 57.5 テーブル（計画 11 回）

(5) ナショナル(リジョナル)予選

文部科学大臣杯： 予選なし：A、B、D（計画 2×2 テーブル）
外務大臣杯： 4 テーブル（計画 4 テーブル）
高松宮妃記念杯： 3 テーブル（計画 4 テーブル）
柳谷杯： 5 テーブル（計画 5 テーブル）
玉川高島屋 S・C 杯： 3 テーブル（計画 3 テーブル）
全日本女子ペア： 2.5 テーブル（計画 5 テーブル）

(6) 山笠リジョナル

リジョナル 1&2： 16.5 テーブル（計画 20 テーブル）
福岡市長杯： 22 テーブル（計画 25 テーブル）
テレビ西日本杯： 25 テーブル（計画 25 テーブル）
新人セクショナル： 9 テーブル（計画 10 テーブル）

(7) 九州リジョナル

リジョナル 1&2： 20 テーブル（計画 20 テーブル）
西日本新聞社杯： 22 テーブル（計画 20 テーブル）
新人ローカル 1&2： 13.5 テーブル（計画 20 テーブル）
新人セクショナル： 5 テーブル（計画 10 テーブル）